

弱き語り

—メアリー・シェリー、『フランケンシュタイン』(1818)、あるいは自伝の歴史性—

小林 徹

外国文化研究室

Weak Narratives :

Mary Shelley's *Frankenstein* (1818), or the Historicity of Autobiography

Toru Kobayashi

World Civilizations

Abstract

To aberration, murder, revenge, and incest, which constitute the main body of Gothicism, the critical attention has been paid about Mary Shelley's *Frankenstein*. But, in contrast, another important aspect has been ignored, in spite of its sheer certainty and significance in the work. It should be noticed that the main characters, Victor Frankenstein and the monster, are genuine narrators and the readers would get to know about these unordinary events or actions through their narrations. This is where the critical significance of the work itself thrives.

To interpret the narratives in the work, it is important to understand both Victor and the monster as the central cultural figures. They use the narrative strategy with intention to form some favorable relationships with listeners, but they fail because their narratives are prevented from developing by the dread which the monster physically represents. Viewed in a broad context, the consequence allegorically signifies the failure of the traditional mode of autobiography, by which authors had tried to make the common understanding about their good reputation between them and readers. Then in Romanticism, the literary genre came to be used as a means to interpret or define the identity of its author. And this modern mode of the genre is also realized in the figure of Robert Walton, the third narrator in the work, who could do nothing but find himself to be surprised at the unintelligibility of his own self. Thus through its

own narratives *Frankenstein* shows the development, or historicity, of autobiographical genre as well as narrates the enigmatic self in the modern age.

I

Mary Shelley による *Frankenstein* (1818) において、最も痛ましい出来事のひとつに、the monster による Victor Frankenstein の弟、William の殺害がある。孤独に苛まれるモンスターは、偶然見付けたその子供を友として傍におこうとするが、彼は嫌がり、そして殺される。この場面が興味深いのは、殺人という作品が根差すジャンルの常套的要素が初めて現れるだけでなく、そこには作品を支配する重要な概念が劇的に表現されているからである。注目するのは、抵抗するウィリアムが死に至る契機である。問題の場面は以下のように描かれていた。

“Urged by this impulse, I seized on the boy as he passed, and drew him towards me. As soon as he beheld my form, he placed his hands before his eyes, and uttered a shrill scream: I drew his hand forcibly from his face, and said, ‘Child, what is the meaning of this? I do not intend to hurt you; listen to me.’

“He struggled violently; ‘Let me go,’ he cried; ‘monster! ugly wretch! you wish to eat me, and tear me to pieces—You are an ogre—Let me go, or I will tell my papa.’

“Boy, you will never see your father again; you must come with me.’

“Hideous monster! let me go; My papa is a Syndic—he is M. Frankenstein—he would punish you. You dare not keep me.’

“Frankenstein! you belong then to my enemy—to him towards whom I have sworn eternal revenge; you shall be my first victim.’

“The child still struggled, and loaded me with epithets which carried despair to my heart: I grasped his throat to silence him, and in a moment he lay dead at my feet. (96-97)

ウィリアムはその「醜い」外観に恐慌を来たし、抗う。そして彼の発した「フランケンシュタイン」という名前が殺害を誘引した。モンスターはその背後に、捜し求めていた人物つまり彼を創ったヴィクターの存在を認め、その創造者への復讐としてウィリアムを殺めたのだ。名前は殺人の契機になるとは、生の尽き果てた肉体がそのなかで累々と横たわる『フランケンシュタイン』にあっては必ずしも言い過ぎではない。事実名前そして肉体、引用では見る者を文字通り圧倒する異形さを備えた身体と死体は、作品を貫く重要な概念上の線分であるのだ。

しかしこの作品に関して、そこではそれらが有機的に関連し展開すると指摘するだけでは、到底その豊かさは把握されない。さらに勘案すべきものがあり、それは語りである。丁寧に読めば必ずわか

ることだが、主要人物の多くは、行動する者というより、語る者である。ところが従来彼らにあって問題視されてきたのは、言葉を紡ぎ出すのとは別の行動であった。それは、例えば人間による人間の創造という侵犯、あるいは逸脱行為、それから殺人、復讐、追跡、近親相姦など、著者シェリーの言葉を借りれば、作品の孕む“so very hideous an idea”(169)を形成する行為、すなわちゴシック文学の構成要素であった(Miyoshi 79-89; Moers 90-99; Tropp 34-51; Thornburg 38-120)。様々な解釈を誘引するという意味でも、それらが暗い魅力を放つのはむしろ確かだが、しかし実際その大半は彼らにより語られた事柄でしかない(Stevick 234-39)。このように『フランケンシュタイン』においては、テキストに忠実であろうとすればするほど、語り手としての登場人物や彼らの語り、または語る行為自体が本来重視されねばならず、従って解釈の出発点としてまず押さえておくべきなのは、これまで等閑視されてきた語りの側面とゴシズムの混交という作品の特徴なのだ。次章からの議論で特に焦点を当てるのは、ヴィクターとモンスターである。名前と肉体という視点から眺めて初めて、語る者としての彼らの独特の相貌が姿を現す。逆に語り手として彼らを捉え直すとき、作品におけるそれらの概念の意義深さがみえてくる。それからこのような分析は、作品の背後の事情、なかでもその発表当時展開していた、ある語りの実情を照出することになる。果たしてその語りとは自伝にほかならず、そしてこの自らの過去を語るという言語行為こそ、件の二人の中心的行動であるのだ。そこで最初に考察するのは、名前と肉体という線分の交点上に結ばれる、ヴィクター、モンスターそれぞれの像であり、その生である。

II

端的にいえば、名前は、その所有者を取り巻く多様な人間関係の基準点である。それを基に家族、家系、友人関係など、すなわち広義の社会が形成され、維持されるのであり、また併せて愛情や共感、伝統の意識、友情などがそこに育まれる。名前とは要するに、その本来的な働きにおいて、人間をめぐるいわば文化的関係性を支えると同時に具現するもの、言い換えれば、その象徴なのだ(Collings 245-58; Gilmore 129-30, 137-38)。先章でみたウィリアム殺害の出来事は、実は名前のこうした機能を表していたともいえる。そしてヴィクターの生は、実質的にこのような名前が次第に崩壊していく過程であったと考えることができる。

『フランケンシュタイン』は Robert Walton という名の人物の登場に始まる。彼は故国イングランドを離れ極地にあり、そこを経由する新航路を見付け出そうと、また“the secret of the magnet”(8)を突き止めようとしている。その途上、彼は放浪する一人のヨーロッパ人を救助する。これが、人間による人間の創造をめぐる恐怖物語の事実上の始まりである。その後放浪者ヴィクターはこれまでの経緯をウォルトンに詳らかにしていくのだが、それは以下のように切り出されていた。

I am by birth a Genevese; and my family is one of the most distinguished of that republic.

My ancestors had been for many years counsellors and syndics; and my father had filled several public situations with honour and reputation. He was respected by all who knew him for his integrity and indefatigable attention to public business. He passed his younger days perpetually occupied by the affairs of his country; and it was not until the decline of life that he thought of marrying, and bestowing on the state sons who might carry his virtues and his name down to posterity. (17-18)

これが、明確なかたちで読者にまず知らされるヴィクターという人物である。彼は自らの家系を述べ、その末裔としての自分を提示している。作品全体を考慮するとき、この出だしは重要である。なぜなら発端において家系が明示されるとは、そうした関係性のなかにヴィクターの生の出発点はあった、言い換えれば、彼という存在は本来的に関係性の上に成立していたことを物語るからである。具体的には、彼の周囲には Alphonse と Caroline の両親、ウィリアムと Ernest の弟たち、いとこやがてはその妻 Elizabeth、そして友人 Clerval がいたのであり、また背後には代々ジュネーヴの「顧問官や地方判事」であった先祖が連なるのだ。要するに彼は当初名前が十分に機能する境遇のうちにあったのであり、そして彼の悲劇はそこからの乖離にその原因があった (Poovey 122-27; Smith, “Frankenstein” 39-59)。¹

成長につれ、学習意欲が旺盛になるヴィクターは、中世の自然哲学や錬金術、その後近代化学に興味を抱き、しかし自身、“Study had before secluded me from the intercourse of my fellow-creatures, and rendered me unsocial” (43) と述べていたように、次第に利己主義の、そして孤立の度を増す。インゴルシュタットの大学に入っても状況は変わらず、家族との関係を絶ったうえで研究が行われる。そして彼の生涯で最大の転機となるモンスターの創造は、それまでの学習の集大成であり、他面それは加速する孤立化の行き着く先でもあった。“a solitary chamber, or rather cell, at the top of the house, and separated from all the other apartments by a gallery and staircase” といった、文字通り隔絶された場所で行われる “filthy creation” (32) に、彼はこのように専心した。

I could not tear my thoughts from my employment, loathsome in itself, but which had taken an irresistible hold of my imagination. I wished, as it were, to procrastinate all that related to my feelings of affection until the great object, which swallowed up every habit of my nature, should be completed. (33)

「愛情」という言葉が象徴するように、学習を通じての侵犯行為への道のりは、畢竟、名前からの離反以外のなにものでもなかったのだ。

その後のヴィクターの生は、復讐心に駆られたモンスターによる、ウィリアムとエリザベス、および召使 Justine とクレルヴァルの直接的、間接的殺害を主な原因とする、孤独化の過程を内実にしてい

る。つまり身近な人間が次々に殺されることにより、関係性成立のためのいわば参照項目が失われ、やがて関係性それ自体が破綻し、その意味で彼は孤独へと、すなわち名前が機能不全に陥った境遇へと転位するのである。

以上のようにヴィクターの生涯をあえて名前の観点から捉え直したのは、ほかでもない、それを対称軸に彼はモンスターと照らし合うからである。² 数多の架空の人物のなかで、モンスターをとりわけ印象深いものにしてしているのは、ひとつに、彼は名前をもたないという点である。事実彼は、“creature”、“wretch”、“monster”、“enemy”、“daemon”、“devil”、“fiend”などと、抽象度の高い名辞で呼ばれるしかない存在なのだ。³ そしてこのことは、彼が本来的に人的な関係性から無縁である、従って通常の文化的歴史的状況に根差すアイデンティティを彼はもたないことを意味する (Botting 16-17; Lew 255-83; Rauch 227-53)。そしてまずこれを理由に彼は激しく苦しむことになる。

ヴィクターの生涯が、モンスターの創造、換言すれば、彼がいわば神になるまでと、そのことゆえの罪悪感、失望、復讐の念が混在する苦悩を生きることのふたつの道程から成るとすれば、モンスターの生涯は、それと対をなす変奏といえる。彼は、人間になるための過程を経た後、その果てに開かれた独特の苦境に耐えねばならぬのだ。感覚器官の発達、素朴な快楽や苦痛の感受、ついで思考能力が培われ、複雑な感情体験も可能となる。それから言語および文字の習得、観察や読書を通じての人間という種そのもの、その社会や歴史の学習へとモンスターは進む。しかし逆説的にもそうした人間化のプロセスが彼にもたらしたのは、ひとつに、先にふれた自身をめぐる関係性の非在という悲劇的認識であった。モンスターは偶然、フランスから逃れて来た De Lacey 家の人々を発見するが、彼らを通して彼が導かれる先にあるのは、まさに家族という関係性であった。そして彼はこのように苦悩する。

“Other lessons were impressed upon me even more deeply. I heard of the difference of sexes; of the birth and growth of children; how the father doated on the smiles of the infant, and the lively sallies of the older child; how all the life and cares of the mother were wrapt up in the precious charge; how the mind of youth expanded and gained knowledge; of brother, sister, and all the various relationships which bind one human being to another in mutual bonds.

“But where were my friends and relations? No father had watched my infant days, no mother had blessed me with smiles and caresses; or if they had, all my past life was now a blot, a blind vacancy in which I distinguished nothing. From my earliest remembrance I had been as I then was in height and proportion. I had never yet seen a being resembling me, or who claimed any intercourse with me. What was I? The question again recurred, to be answered only with groans. (81)

モンスターにとり家族がないことは全く不可解でしかない。そしてその謎が、「私とは何であったのか」という存在論的な問いへと彼を追い遣る。この成り行き自体、名前が象徴する関係性と個々人のアイデンティティの因果律を如実に物語るものだが、ともあれ、その問いに答えを出せない事態に彼は苦しむのだ。⁴ そして翻るに、こうした責苦は誕生の時点で既に彼に運命付けられていた。その目に生気が宿ったとき、親たるヴィクターは自分の成果への恐怖のあまり逃亡した、つまり名付けという、関係性のなかに我が子を取り込む行為を放棄したのだ (35-37) (McInerney 455-75)。そしてこうした不在の関係性にまつわる苦悩は、彼が人間化の途上で得た別の発見により倍加されるのだが、その際いわば名前の代替物が立ち現れる。本論冒頭で指摘した作品を貫くもうひとつの重要な線分、肉体がそれだ。

『フランケンシュタイン』では人間の肉体的側面が強調されていることに気付くのは難しくない。頻出するのはずばり死体である。先述のように、多数の人間が死してそこに横たわっている。それからこれらが文字通り集められたものがモンスターであった。彼は、“I collected bones from charnel houses; and disturbed, with profane fingers, the tremendous secrets of the human frame” (32) と述べるヴィクターの手になる、死体のコラージュ、もしくはハイブリッドなのだ。そしていま注目するのはその彼の肉体である。創造主描くところ、彼の外見はこうであった。

His yellow skin scarcely covered the work of muscles and arteries beneath; his hair was of a lustrous black, and flowing; his teeth of a pearly whiteness; but these luxuriations only formed a more horrid contrast with his watery eyes, that seemed almost of the same colour as the dun white sockets in which they were set, his shrivelled complexion, and straight black lips. (34)

肉体の異形性、これが創造の際与えられた、彼が生涯背負う独特の特徴なのであった。それに対しては、“Oh! no mortal could support the horror of that countenance. A mummy again endued with animation could not be so hideous as that wretch” (35) と、当のヴィクターですら戦慄を隠せず、そしてモンスター自身も同様、ド・ラセー家の人々と比較するとき、このように驚愕せざるを得ないのだ。

“I had admired the perfect forms of my cottagers—their grace, beauty, and delicate complexions: but how was I terrified, when I viewed myself in a transparent pool! At first I started back, unable to believe that it was indeed I who was reflected in the mirror; and when I became fully convinced that I was in reality the monster that I am, I was filled with the bitterest sensations of despondence and mortification. Alas! I did not yet entirely know the fatal effects of this miserable deformity. (76)

彼らとの差異から彼は自分が文字通り「モンスター」でしかないことを痛感し、そしてこの発見がやがて起こる殺戮の契機となるのだ。⁵ 肉体の異形さと関係性の不在が相俟って、モンスターをさらなる苦悩の淵へと突き落とす。つまり彼にあって肉体は、孤独という境遇を力強く支えていた、いや、その異形さゆえに彼は常に孤立化を強いられたのだ。作品中頻出するモンスターと人々の遭遇の挿話が、そのことを明瞭に表している。どの場合でも内容は同じで、彼は交流を求めて近づくが、人々の誰もがその肉体に恐怖し、ある者は暴力を働き、そうして彼は徹底的に排除されるのである。⁶ とすればこの点、肉体は、関係性をめぐり、名前の対極にあるといえる。名前は関係性を浮上させ、いわばそれを手繰り寄せるのに対し、肉体はそうした契機さえ消し去るのだ。そしてヴィクターが当初名前の所有者であったことに対して、モンスターは本来上述の意味での肉体を所有する者だったといえるだろう。この世に生を受けて以来、彼は人的な関係性とは無縁の生を送るのだから。⁷ そこでこうした肉体と名前の機能をふまえ、モンスターとヴィクターの生涯を捉え直すと、どのようになるか。結論からいえば、出発点は異なるにせよ、二人の生涯は構造的に同じである。要するに、ともにそこでは肉体が名前を突き崩すという事態が生じ、最終的に孤独に至らしめるのだ。ヴィクターの場合、モンスターによる近親者の殺害により孤立していった。一方モンスターにあっては、彼が抱いていた、人々との交際という関係性、つまり名前の希求は、異形のその肉体により常に挫折させられたのだ。そして孤立の苦境にあって二人は、そこからの脱却のために同様の手段に賭けるのだが、それが語る行為にほかならない。次章では改めて彼らの語りを分析する。

III

作品において会話の域を越える語りを紡ぎ出す人物は、ウォルトン、ヴィクター、そしてモンスターの三人である。全体として彼らの語りは、ある語りが別の語りを包含するという、いわば入れ子状に構成されている。読者が最初に出会うウォルトンは、手紙および手記の形式を用い、イングランドにいる姉、Mrs. Saville に航海の準備の模様や、ヴィクターとの出会いも含む旅の様子を伝える。その報告のなかにヴィクターによる語りが、その内部にモンスターによる語りの主要部分があるのだ。これはゴシック文学の伝統的な物語構造ではある (Sedgwick 9-39; Oates 543-54)。ところが『フランケンシュタイン』に特徴的なのは、それに加え、語る行為の多くが語り手自身の時間的経緯、つまりその過去を問題化していることである。すなわち作品には、ゴシックとともに、自伝という文学ジャンルが滑り込ませてあるのだ。そしてその様相はとりわけヴィクターとモンスターの語りに際立っている。先章で確認した彼らの生は、実は自身の口から語られたものであったわけだ。そこで彼らの自伝的語りの考察にあたり、留目すべきは聞き手の存在である。というのもそこにこそ彼らの語りの要点が、ひいては作品の豊饒性を解き明かすひとつの鍵があると考えられるからだ。

自伝的であることも含め、二人の語る行為にいくつか共通点が見出せるなかで、作品中明示されているのが、語り手の雄弁さである。ウォルトンがヴィクター救出後すぐに認めたのは、彼の “un-

paralleled eloquence” (16)であったし、一方、死を目前にして彼がウォルトンに警告するのは、“He is eloquent and persuasive; and once his words had even power over my heart: but trust him not” (145)と述べるように、モンスターの言葉の「力」であった。よって修辭学の基礎を復習するまでもなく、彼らの語りは、単に対他者的である以上に、聞き手の説得という働きを有することに特徴があるといえる (Tannenbaum 101-13; Johnson 2-10; Newman 141-63)。そこでまずヴィクターの語りから考えると、その聞き手はウォルトンである。家族の大方を殺され、その敵を討つべくヴィクターは、一人極地までモンスターを追ってきた。“Scoffing devil! Again do I vow vengeance; again do I devote thee, miserable fiend, to torture and death. Never will I omit my search, until he or I perish” (142)という言葉にも明らかなほどに、彼の復讐の念は強い。しかし健康状態はひどく、死期も近いと自覚している。彼がウォルトンに向かって行う自伝行為はこうした背景をもち、そのことと先に指摘した雄弁さのゆえに、語りは必然的に手段となる。そこには事実以下のねらいがあったのだ。自身の過去を語り終えたヴィクターはこう述べていた。

Oh! when will my guiding spirit, in conducting me to the daemon, allow me the rest I so much desire; or must I die, and he yet live? If I do, swear to me, Walton, that he shall not escape; that you will seek him, and satisfy my vengeance in his death. Yet, do I dare ask you to undertake my pilgrimage, to endure the hardships that I have undergone? No; I am not so selfish. Yet, when I am dead, if he should appear; if the ministers of vengeance should conduct him to you, swear that he shall not live—swear that he shall not triumph over my accumulated woes, and live to make another such a wretch as I am. (145)

自分が死んだら、モンスターへの復讐を継いでもらいたい、つまりその願いをウォルトンに受諾させるべく、彼は語ったのだ。⁸そしてこの説得が成功するとき、二人のあいだに同一の価値観に基づく関係性が結ばれることになる (Aldrich and Isomaki 125-26)。そこで問題はその結果なのだが、それを確かめるには、ウォルトンが語り手として再登場する箇所をみななければならない。

やがてヴィクターは、心身の衰弱のため亡くなる (152)。その後まもなくウォルトンは、船に潜入したモンスターと、彼の亡骸を前に相見えるのだが、そのときが彼の語りの「力」が試されるときであった。そのあたりをウォルトンはこう語る。

I entered the cabin, where lay the remains of my ill-fated and admirable friend. Over him hung a form which I cannot find words to describe; gigantic in stature, yet uncouth and distorted in its proportions. As he hung over the coffin, his face was concealed by long locks of ragged hair; but one vast hand was extended, in colour and apparent texture like that of a mummy. When he heard the sound of my approach, he ceased to utter exclamations of

grief and horror, and sprung towards the window. Never did I behold a vision so horrible as his face, of such loathsome, yet appalling hideousness. I shut my eyes involuntarily, and endeavoured to recollect what were my duties with regard to this destroyer. (152)

彼の目がモンスターの異形な外見に釘付けになっていることに注目しなければならない。そしてさらに重要なのは、彼が「思わず目を閉じ」、「自分がこの破壊者に関してなすべきことを思い出すべく努め」ねばならなかったと述べている点、すなわちそうしたモンスターの肉体的特徴に圧倒され、ウォルトンは復讐行為に移れないという事態である。しかも彼はその直後にも、“I approached this tremendous being ; I dared not again raise my looks upon his face, there was something so scaring and unearthly in his ugliness” (153) と述べ、自身の無能ぶりを二度も白状せざるを得ないほどなのだ。要するにヴィクターの自伝的語りは、結果的に失敗した。そしてこの成り行きは、これまでの議論での用語を用いれば、名前を求める語りは肉体により打ち砕かれたことを意味する。ではこの点、モンスターの語りはどうか。

モンスターの相手はヴィクターである。モンタンヴェール山頂に登って来たヴィクターの前に突然彼が現れた。敵意を露にするヴィクターだが、モンスターはまず、創造者の被造物に対する責任と義務を論じ、ついで自分は本来的には善良であると弁じ、さらに脅迫の言葉を時折口走りながら、彼に自分のこれまでの歴史を聞くよう迫る(63-67)。そしてその自伝行為にも、聞き手に向けられたあるねらいが伴っていた。

We may not part until you have promised to comply with my requisition. I am alone, and miserable ; man will not associate with me ; but one as deformed and horrible as myself would not deny herself to me. My companion must be of the same species, and have the same defects. This being you must create. (97)

その境遇からどうあっても抜け出せない孤独のモンスターは、ヴィクターに自分の伴侶となる彼自身と同型の女性版を創らせようとするのだ。そしてためらう彼にたたみかける以下のモンスターの言葉も注目に値する。

If I have no ties and no affections, hatred and vice must be my portion ; the love of another will destroy the cause of my crimes, and I shall become a thing, of whose existence every one will be ignorant. My vices are the children of a forced solitude that I abhor ; and my virtues will necessarily arise when I live in communion with an equal. I shall feel the affections of a sensitive being, and become linked to the chain of existence and events, from which I am now excluded. (100)

ここにはモンスターが明らかに関係性を、そしてそこに生じる愛情を、すなわち名前をこそ欲しているのが見て取れる。従って彼の場合も、今度は二重の意味で、その語りは名前獲得のための手段だったといえる。すなわち創造者としての力能をもつヴィクターとのあいだにいわば親子関係を再度打ち立てたい、そしてその実現はひいては自らと同等の者との関係性の樹立へと通じるはずなのだ。

結局ヴィクターは折れ、二度目の人間創造が、最初るときと同様、スコットランドの北、オークニー諸島にあるひとつの島という、隔絶された環境のなかで開始されたのだが、しかし生命を吹き込む最終段階に至り、彼はその未完の肉体を破壊する。結論をいえば、こうしてモンスターの語りは敗北を喫したわけだが、ここで重要なのは、ヴィクターが創造を放棄した理由である。彼は、女性版モンスターはより邪悪な、あるいは狡知にたけた者かもしれぬと想像し、またモンスター同士が仲違いし、さらに凶悪化するのではと心配するのだが(114)、決定的だったのは、彼が行き着いたこうした判断であった。

Even if they were to leave Europe, and inhabit the deserts of the new world, yet one of the first results of those sympathies for which the daemon thirsted would be children, and a race of devils would be propagated upon the earth, who might make the very existence of the species of man a condition precarious and full of terror. Had I a right, for my own benefit, to inflict this curse upon everlasting generations? I had before been moved by the *sophisms* of the being I had created; I had been struck senseless by his fiendish threats: but now, for the first time, the wickedness of my promise burst upon me; I shuddered to think that future ages might curse me as their pest, whose selfishness had not hesitated to buy its own peace at the price perhaps of the existence of the whole human race. (114-15)

要するに最大の理由は肉体の問題にあったのだ。ヴィクターは、男女一対のモンスターから同様の子孫が多数誕生することを危惧したため破壊に出たのである。そして以上のモンスターの語りの顛末を振り返るとき、そこにも先にヴィクターの語りにおいて確かめられた図式が見出せるに違いない。名前を求める語り、それは一旦は成功の兆しをみせたが、結局肉体により、この場合増殖の可能性を宿す肉体への恐怖のために、挫折を強いられたのだ。⁹

そしてここに至り、『フランケンシュタイン』の豊かさを改めて指摘することができる。そこでこれまでの議論全体を、自伝様式の歴史性といった視野のうちに置き直してみたい。するとまず、自伝という文学ジャンルの全体像に照らすと、ヴィクターとモンスターの語りは実に伝統的な所作であったといえる。自伝とは当初著者による自賛、または自己弁護のための手段であった。彼らは自らの過去に関する語りを通じ読者の説得を試みる、すなわち自分と読者とのあいだに、著者自身をめぐる価値判断を共有する一種の共同体を、言い換えれば、著者にとり好ましい関係性を打ち立てようとしたのだ。そしてその意味で自伝はすぐれて対他者的な言語行為だったのである。¹⁰ 先にヴィクターらの語

りを伝統的と述べたのは、この意味においてである。そこには確かに聞き手がおり、またその人物とのあいだになんらかの関係を樹立するというねらいが、いや語り手の欲望が認められたのであった。しかし先述のとおり、彼らの語りは結局不首尾に終わった。とすると次に問うべきは、そうした失敗そのもの、それから語りの破壊者、すなわちモンスターに代表される肉体の意味である。そこで想起したいのは、自伝の歴史をめぐるある重要な事実である。つまりそれは決して静的なジャンルではなかったのだ。自伝は18世紀末を境に、その様相を大きく変える、端的にいえば、対自的な様式へと変貌したのだ。著者にあってはもはや、読者とのあいだに良好な関係性を築くことが目的ではない。関心の焦点は著者自身の内側に結ばれ、自分とはどのような存在であるのか、その答えを自らの過去の精査を通じて探し出す、これが自伝のねらいとなる。己の過去を語るという手続き自体はそのままだとしても、他者から自分へと指向性が逆転したのだ。それから、改めて強調するまでもなく、上のような問いが発せられる以上、自伝記述者の眼前には解明されるべき自己が、従って彼にとり不可解な自己が立ち現れていた。そう、それこそが新しい自伝様式が誕生した理由だったのだ。そうした自己を解明するべく、著者たちは言語的に自らの過去へと赴いたのである。そして問題のヴィクターらによる語りの行為の結末は、この近代に入り生じた自伝ジャンルの展開の一端を反映すると読めるのだ。再度確認しておけば、彼らの語りの失敗とは、名前を求める語りが肉体により突き崩される事態にほかならず、そこでこの肉体つまりモンスターは、自伝の歴史性でいうところの、近代的自伝において探究されるべき不可解な自己と明確に照応する。彼の属性はどのようなものであったか。人体の断片的な部分の寄せ集め。恐怖の対象。「私とは誰であり、何であるのか」との存在論的な自問について答えを見出せない。両義的な、あるいは矛盾に満ちた存在、すなわち人間的な優しさや強い倫理観、高潔さがみられる反面、怒り、復讐心といった否定的感情にも駆られやすく、またこれは行動にも反映され、川に溺れる少女を助けるかと思えば(95)、数々の殺人も犯す。そして極め付きは、モンスターとは名前をもたぬ者、つまり関係性からの逸脱ゆえに、確たる己のアイデンティティを所有しない者なのだ。¹¹ これらはみな、ロマン主義者が出くわした不可解な自己の属性以外のなにもものでもない(Hartman 46-56; McFarland; Wolfson 17-41; Brown 275-301)。そこでこれをふまえると、ヴィクターとモンスターによる語りの顛末は、不可解な自己の登場をもち、相対的に旧来の自伝様式は価値下落を強いられるに至ったことを表象すると思われるのだ。しかもそのことは、物語の時代設定が1700年代、より正確には、1790年代、あるいは18世紀末に置かれていたこととも照応している。¹² というのも、既に述べたように、そうした不可解な自己が見出されたことを受け、その探究を目的とした新しい自伝が誕生するのが、近代、まさにおよそその年代だったからだ。『フランケンシュタイン』の豊饒性の一因はまさにこの点にある。この作品は、自伝という文学ジャンルの歴史的展開、繰り返すと、旧来の對他者的な様式が自己の不可解さの発見を契機に表舞台から退くという有様を照出していたのだ。ところがその豊かさの内実は、それに留まるものではない。つまりこの作品はさらに当時の自伝をめぐる事情を反映していたのだ。そこで注目するのは、第三の語り手ウォルトンである。

IV

作品出版の年は1818年、そのとき既に自伝記述者は自己解明の必要性にこそ迫られていたことは、文学史から容易に読み取れる。例えば代表的なところで、William Wordsworthは、早くも1799年と1805年の二度にわたり、自伝詩 *The Prelude* において自己の定式化を試み、そして1821年には、Thomas De Quinceyが、*Confessions of an English Opium-Eater* において、阿片が開示したヴィジョンを通じ自己の探究を行うことになる。一方『フランケンシュタイン』は、確かにそれ自体近代的自伝とは言い難く、またヴィクターやモンスターはワーズワスらが直面した不可解な自己とはおそらく無縁であるのだが (Newman 141-63)、しかしこの作品は旧来の自伝様式の没落ばかりか、新しい様式の到来をも指し示していた。そしてそれはウォルトンの物語を通じてであったのだ。

最初に注目したいのは、ここでも彼の名前である。当初ウォルトンは姉宛ての書簡という形式のなかで語っていた。それは数通にわたるのだが、問題はそこに付されている署名である。順番通りに挙げると、第一信では“Your affectionate brother, R. WALTON”(9)とあり、第二信において、“Your affectionate brother, ROBERT WALTON”(12)と、初めて正確な氏名が明かされるが、第三信では、“Most affectionately yours, R. W.”(12)と簡略化され、最後の第四信に至っては、その表題はあるものの、そこでは書簡から手記へと形式は転換され、そしてその手記自体、明確な宣言もなされず、唐突に終了するのだが、そこには署名はないのだ。こうした名前が消えて行くプロセスは、興味深いことに、ウォルトンが辿る境遇上の変容と構造的に一致している。元々彼は、姉との書簡上のやりとりで暗示されていたように、人的な関係性の上に存在する者であった。しかし物語も終わりに近づくとつれ、大きな変化を被る。過酷な極地に留まろうとする彼に対し、身の安全を第一に考えた船員たちは帰還を主張し、暴動を示唆するまでに至る。彼は打つ手も無くその言い分を聞き入れ、南へと舵をとる。しかも友人として頼りにしていたヴィクターも亡くなり、彼は文字通り孤立無縁の状態に陥るのだ(148-52)。要するにウォルトンは、名前が象徴する関係性に支えられる状況から孤独の境遇へ、すなわちそうした意味での名前が不在の状況へと移行したのだ。そしてこの成り行きを自伝の歴史性から捉え直すなら、そこに旧来の自伝様式が退くのと並行して一個の自己が焦点化されていく模様をみとめることができるだろう。そして作品の結末部分では、その後の展開、すなわち近代的な自伝様式そのものがほのめかされていると読めるのだ。

ヴィクターの亡骸の傍らでウォルトンに対峙するモンスターは、自分のこれまでの所行の弁明の後、

I shall quit your vessel on the ice-raft which brought me hither, and shall seek the most northern extremity of the globe; I shall collect my funeral pile, and consume to ashes this miserable frame, that its remains may afford no light to any curious and unhallowed wretch, who would create such another as I have been. I shall die. (155)

と、自殺の意思を告げる。そして以下が『フランケンシュタイン』の結言であった。

He sprung from the cabin-window, as he said this, upon the ice-raft which lay close to the vessel. He was soon borne away by the waves, and lost in darkness and distance. (156)

言及されてはいないが、そこには一人佇むウォルトンがいることは読み取れるだろう。そして異形なモンスターに圧倒されるばかりか、このように結局彼に逃げられてしまうウォルトンに、近代的な自伝記述者の姿を重ね合わせることができるのだ。すなわち、不可解な自己を見出してしまったが、しかしそれを捉えられず、そしてこの苦い経験において、ウォルトンは、その自己をこそ探究の対象とする近代の己の語り手たる資格を引き受けてしまったのだ。ヴィクターは死に、モンスターも消える。旧来の自伝記述者たちが去り、取り残されたウォルトンの孤独な有様は、己の不可解性を凝視するロマン主義者を髣髴させる。しかしその未来は決して明るいものではなかったろう。再び文学史が教えるところでは、自己解明とは極めて困難な作業であった。先にふれたワーズワスの『序曲』は生涯手に入れられることになり、そしてその改訂の歴史が物語るのは、自己の定式化の試みはついぞ彼に満足のいく結果をもたらさなかったという事実であり、同様に、その自伝作品を書き改め続けたド・クインシーにおいても、彼が最終的に見出したのは、自己は文字通り計り知れない深淵でしかないという戦慄の真実だったのだ (Arac 57-70; Porter 591-609)。そしてもう一度『フランケンシュタイン』の結末部分に立ち戻ると、この作品はさらにそのことも物語っていたと思しい。孤独の自伝記述者ウォルトン。それから自らその存在を滅ぼすことを宣しつつも、著者の記述ではその姿が消えたとは書かれていないモンスター、要するに、不意に現れる可能性を残しながら、自己は不可解なままに依然決着がつけられていないのだ。そこにさらに重要な真実を読み取ろうとするなら、この作品は、その内部に編み込まれた自伝の歴史性を通じて、近代の自己のそうした有様をも雄弁に語っていたといえよう。

注

- 1 さらにヴィクターは後に自分の家族について、

My father directed our studies, and my mother partook of our enjoyments. Neither of us possessed the slightest pre-eminence over the other; the voice of command was never heard amongst us; but mutual affection engaged us all to comply with and obey the slightest desire of each other. (24)

と語るのだが、この言葉は彼がそのような境遇に当初あったことを裏書きする。つまり彼の家庭は「愛情」にあふれる共同体だったのだ。また著者の夫、Percy Bysshe Shelleyの手になる『フランケンシュタイン』の“Preface”では、作品の目的のひとつは、“the exhibition of the amiableness of domestic affection, and the excellence of universal virtue”(6)とあり、このことから作品では家族関係をめぐる問題性が重視されていることがうかがえる。なお作品に

おける家族のテーマを論じた批評については、例えば、Levine, “*Frankenstein*” 14-30、Ellis 123-42、Bowerbank 418-31、Mellor 38-88、Smith, “‘Cooped up’” 270-85、Komisaruk 409-41を参照。

- 2 従来の批評においてしばしば、ヴィクターとモンスターは並行関係、もしくは分身の関係にあることが指摘されてきた。その解釈自体は全く正しい。二人とも語る人物であることはもとより、学習が及ぼす影響、創造や殺人といった倫理に悖る行為、果たされない結婚生活など、プロットを追うだけでも、両者の共通点は容易に見出せる。また分身という点では、代表的なところで、ヴィクターを理性的側面、モンスターを感情的本能的側面、あるいはその逆、と捉え、よって二人は一個の人間の二面を象徴するとみなす解釈 (Kaplan and Kloss 119-45; Homans 100-19; Spark 153-78) や、モンスターはヴィクターの男性性を具現しているとする解釈 (Veeder, “Gender” 38-49) がある。さらにそのような解釈についてはほかに、Miyoshi 79-89、Bloom 118-29、Levine, “Ambiguous” 3-30、Veeder, *Mary Shelley* 89-99、Feldman 67-77、Crisman 27-41などがある。
- 3 なお名前を有しないという点は、著者シェリー自身も、モンスターの重要な特徴であるとみなしていた。1823年に『フランケンシュタイン』の翻案が劇場にかかった際、その広告ビラに、本来「モンスター」と書かれるべき部分が、“_____”と空白で表記されていたことに彼女は満足したという。さらにこの点については、Kiely 158-60、Gilbert and Gubar 234-46参照。
- 4 作品中モンスターは、こうした存在論的な問いにしばしば直面する。例えば、*Sorrows of Werter* を読んだ直後がそうであり (86)、また *Paradise Lost* の読書を通じて、彼は自己把握の困難を再認識する (87)。この点については、Heller 325-41参照。
- 5 少なくともその発言のうえでは、こうした肉体の異形性こそ、モンスターがヴィクターに復讐心を抱く大きな理由、ひいては殺戮が引き起こされる原因だったと考えられる。創造の行われた部屋にあった服を掠め取ったモンスターは、後にそのポケットのなかに、創造の手順が書かれたヴィクターの手記を発見し、そこに彼は “my accursed origin” (87) を知る。そしてその際彼の感情はこのように激発する。

‘Hateful day when I received life!’ I exclaimed in agony. ‘Cursed creator! Why did you form a monster so hideous that even you turned from me in disgust? God in pity made man beautiful and alluring, after his own image; but my form is a filthy type of your’s, more horrid from its very resemblance. Satan had his companions, fellow-devils, to admire and encourage him; but I am solitary and detested.’ (88)

注目したいのは、怨念の吐露の直後に肉体の異形性が言及されている点である。つまりモンスターの心情では、そこにこそ憎しみの根拠があるのだ。なお物語の進行上、モンスターのヴィクターへの復讐心が決定的になったのは、本文でも後にふれる、ド・ラセー家との交際が夢に終わったときであったのだが、その際にも彼の肉体の有様がその最大の原因になっていた (91)。この点については、Cantor 124-28参照。

- 6 こうした挿話については、例えば、70, 70-71, 71-91, 95-96, 96-97を参照。またこれらの挿話に関する議論としては、Gardner 182-97参照。
- 7 これに関連して、Christopher Small は、逆に作品中ヴィクターの身体的特徴に関する言及はないと指摘している (102-03, 120-21)。
- 8 死ぬ間際にヴィクターは、まわりくどくではあるが、もう一度ウォルトンに同じ懇願をする (151-52)。
- 9 なおこうした語りの失敗について、モンスターは既に経験済みであったと思われる。先に本文でもふれたド・ラセー家への接触がそれだ。彼は当初彼らの目の前に姿を現すのをためらい、それは以下の理由からであった。

I improved, however, sensibly in this science, but not sufficiently to follow up any kind of conversation, although I applied my whole mind to the endeavour: for I easily perceived that, although I eagerly longed

to discover myself to the cottagers, I ought not to make the attempt until I had first become master of their language; which knowledge might enable me to make them overlook the deformity of my figure; for with this also the contrast perpetually presented to my eyes had made me acquainted. (76)

つまりモンスターは、人々を恐れさせるその肉体の異形性は言語の力により克服できると考え、そこでその力をわがものにすることを優先させたのだ。しかし後にそれが誤りであったと、彼は文字通り身をもって悟るのである。そしてこのことと、本文で分析した自伝行為を考え合わせると、畢竟『フランケンシュタイン』は語る行為のひとつの限界を暴き出す作品であったと捉えることもできる。なおこうした点については、Brooks 205-20、Cottom 60-71、Schopf 33-52、Behrendt, “Language” 78-84参照。

- 10 本論における一文学ジャンルとしての自伝に関する議論は、Weintraub 18-48, 115-65, 294-376、Spengemann 62-165、Pascal 21-60, 179-95、Sturrock 49-81, 132-62に負う。
- 11 この点については、Swingle 51-65、Musselwhite 51-60、Halberstam 1-52、Hogle 176-210、Williams 62-63参照。
- 12 ウォルトンによるサヴィル夫人宛ての第一信には、“Dec. 11th, 17—”(7)という日付があり、むろんこれだけでは物語の時代設定は甚だ不確かではあるが、それを本文でも指摘したように18世紀末の年代だとする見解は少なくない。例えば、Wexelblatt 101-17、Montag 300-11参照。

引用文献

- Aldrich, Marcia, and Richard Isomaki. “The Woman Writer as Frankenstein.” Behrendt, *Approaches* 121-26.
- Arac, Jonathan. *Critical Genealogies: Historical Situations for Postmodern Literary Studies*. 1987. New York: Columbia UP, 1989.
- Behrendt, Stephen C., ed. *Approaches to Teaching Shelley’s Frankenstein*. 1990. Approaches to Teaching World Literature. New York: Modern Language Association, 2001.
- . “Language and Style in *Frankenstein*.” Behrendt, *Approaches* 78-84.
- Bloom, Harold. “*Frankenstein, or the Modern Prometheus*.” *The Ringers in the Tower: Studies in Romantic Tradition*. 1971. Chicago: The U of Chicago P, 1973. 118-29. Rpt. of “*Frankenstein: Or, the New Prometheus*.” *Partisan Review* 32 (1965): 611-18.
- Botting, Fred. *Making Monstrous: Frankenstein, Criticism, Theory*. Manchester: Manchester UP, 1991.
- Bowerbank, Sylvia. “The Social Order vs. the Wretch: Mary Shelley’s Contradictory-Mindedness in *Frankenstein*.” *ELH* 46 (1979): 418-31.
- Brooks, Peter. “‘Godlike Science/Unhallowed Arts’: Language, Nature, and Monstrosity.” Levine and Knoepfelmacher 205-20.
- Brown, Marshall. “A Philosophical View of the Gothic Novel.” *Studies in Romanticism* 26 (1987): 275-301.
- Cantor, Paul A. *Creature and Creator: Myth-Making and English Romanticism*. 1984. Cambridge: Cambridge UP, 1985.
- Collings, David. “The Monster and the Imaginary Mother: A Lacanian Reading of *Frankenstein*.” Smith, *Mary Shelley* 245-58.
- Cottom, Daniel. “*Frankenstein* and the Monster of Representation.” *Sub-Stance* 28 (1980): 60-71.
- Crisman, William. “‘Now Misery Has Come Home’: Sibling Rivalry in Mary Shelley’s *Frankenstein*.” *Studies in Romanticism* 36 (1997): 27-41.

- Ellis, Kate. "Monsters in the Garden: Mary Shelley and the Bourgeois Family." Levine and Knoepfelmacher 123-42.
- Feldman, Paula R. "Probing the Psychological Mystery of *Frankenstein*." Behrendt, *Approaches* 67-77.
- Gardner Joseph H. "Mary Shelley's Divine Tragedy." *Essays in Literature* 4 (1977): 182-97.
- Gilbert, Sandra M., and Susan Gubar. *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination*. New Haven: Yale UP, 1979.
- Gilmore, Leigh. *The Limits of Autobiography: Trauma and Testimony*. Ithaca: Cornell UP, 2001.
- Halberstam, Judith. *Skin Shows: Gothic Horror and the Technology of Monsters*. Durham: Duke UP, 1995.
- Hartman, Geoffrey H. "Romanticism and 'Anti-Self-Consciousness.'" *Romanticism and Consciousness: Essays in Criticism*. Ed. Harold Bloom. New York: Norton, 1970. 46-56.
- Heller, Lee E. "*Frankenstein* and the Cultural Uses of Gothic." Smith, *Mary Shelley* 325-41.
- Hogle, Jerrold E. "*Frankenstein* as Neo-Gothic: From the Ghost of the Counterfeit to the Monster of Abjection." *Romanticism, History, and the Possibilities of Genre: Re-Forming Literature 1789-1837*. Eds. Tiltottama Rajan and Julia M. Wright. Cambridge: Cambridge UP, 1998. 176-210.
- Homans, Margaret. *Bearing the Word: Language and Female Experience in Nineteenth-Century Women's Writing*. 1986. Women in Culture and Society. Chicago: The U of Chicago P, 1989.
- Johnson, Barbara. "My Monster/My Self." *Diacritics* 12 (1982): 2-10.
- Kaplan, Morton, and Robert Kloss. *The Unspoken Motive: A Guide to Psychoanalytic Literary Criticism*. New York: Free Press, 1973.
- Kiely, Robert. *The Romantic Novel in England*. 1972. Cambridge: Harvard UP, 1979.
- Komisaruk, Adam. "'So Guided by a Silken Cord': *Frankenstein's* Family Values." *Studies in Romanticism* 38 (1999): 409-41.
- Levine, George. "The Ambiguous Heritage of *Frankenstein*." Levine and Knoepfelmacher 3-30.
- . "*Frankenstein* and the Tradition of Realism." *Novel* 7 (1973): 14-30.
- Levine, George, and U. C. Knoepfelmacher, eds. *The Endurance of Frankenstein: Essays on Mary Shelley's Novel*. 1979. Berkeley: U of California P, 1982.
- Lew, Joseph W. "The Deceptive Other: Mary Shelley's Critique of Orientalism in *Frankenstein*." *Studies in Romanticism* 30 (1991): 255-83.
- McFarland, Thomas. *Romanticism and the Forms of Ruin: Wordsworth, Coleridge, and Modalities of Fragmentation*. Princeton: Princeton UP, 1981.
- McInerney, Peter. "*Frankenstein* and the Godlike Science of Letters." *Genre* 13 (1980): 455-75.
- Mellor, Anne K. *Mary Shelley: Her Life, her Fiction, her Monsters*. New York: Routledge, 1988.
- Miyoshi, Masao. *The Divided Self: A Perspective on the Literature of the Victorians*. New York: New York UP, 1969.
- Moers, Ellen. *Literary Women*. New York: Doubleday, 1976.
- Montag, Warren. "'The Workshop of Filthy Creation': A Marxist Reading of *Frankenstein*." Smith, *Mary Shelley* 300-11.
- Musselwhite, David E. *Partings Welded Together: Politics and Desire in the Nineteenth-Century English Novel*. London: Methuen, 1987.
- Newman, Beth. "Narratives of Seduction and the Seductions of Narrative: The Frame Structure of *Frankenstein*." *ELH* 53 (1986): 141-63.
- Oates, Joyce Carol. "Frankenstein's Fallen Angel." *Critical Inquiry* 10 (1984): 543-54.

- Pascal, Roy. *Design and Truth in Autobiography*. 1960. History and Historiography. New York : Garland, 1985.
- Poovey, Mary. *The Proper Lady and the Woman Writer : Ideology as Style in the Works of Mary Wollstonecraft, Mary Shelley, and Jane Austen*. Women in Culture and Society. 1984. Chicago : The U of Chicago P, 1985.
- Porter, Roger S. "The Demon Past : De Quincey and the Autobiographer's Dilemma." *Studies in English Literature 1800-1900* 20 (1980) : 591-609.
- Rauch, Alan. "The Monstrous Body of Knowledge in Mary Shelley's *Frankenstein*." *Studies in Romanticism* 34 (1995) : 227-53.
- Schopf, Sue Weaver. "'Of What a Strange Nature is Knowledge!': Hartleian Psychology and the Creature's Arrested Moral Sense in Mary Shelley's *Frankenstein*." *Romanticism Past and Present* 5 (1981) : 33-52.
- Sedgwick, Eve Kosofsky. *The Coherence of Gothic Conventions*. New York : Arno P, 1980.
- Shelley, Mary. *Frankenstein*. Ed. J. Paul Hunter. New York : Norton, 1996.
- Small, Christopher. *Mary Shelley's Frankenstein : Tracing the Myth*. Pittsburgh : U of Pittsburgh P, 1973. Rpt. of *Ariel Like a Harpy : Shelley, Mary and Frankenstein*. 1972.
- Smith, Crosbie. "Frankenstein and Natural Magic." *Frankenstein, Creation and Monstrosity*. Ed. Stephen Bann. Critical Views. London : Reaktion, 1994. 39-59.
- Smith, Johanna M. "'Cooped up' : Feminine Domesticity in *Frankenstein*." Smith, *Mary Shelley* 270-85.
- , ed. *Mary Shelley : Frankenstein*. Case Studies in Contemporary Criticism. Boston : Bedford Books, 1992.
- Spark, Muriel. *Mary Shelley*. London : Constable, 1988.
- Spengemann, William C. *The Forms of Autobiography : Episodes in the History of a Literary Genre*. New Haven : Yale UP, 1980.
- Stevick, Philip. "*Frankenstein* and Comedy." Levine and Knoepfelmacher 221-39.
- Sturrock, John. *The Language of Autobiography : Studies in the First Person Singular*. Cambridge : Cambridge UP, 1993.
- Swingle, L. J. "Frankenstein's Monster and its Romantic Relatives : Problems of Knowledge in English Romanticism." *Texas Studies in Literature and Language* 15 (1973) : 51-65.
- Tannenbaum, Leslie. "From Filthy Type to Truth : Miltonic Myth in *Frankenstein*." *Keats-Shelley Journal* 26 (1977) : 101-13.
- Thornburg, Mary K. Patterson. *The Monster in the Mirror : Gender and the Sentimental/Gothic Myth in Frankenstein*. Studies in Speculative Fiction 14. Ann Arbor : UMI Research P, 1987.
- Tropp, Martin. *Mary Shelley's Monster*. Boston : Houghton Mifflin, 1977.
- Veeder, William. "Gender and Pedagogy : The Questions of *Frankenstein*." Behrendt, *Approaches* 38-49.
- . *Mary Shelley and Frankenstein : The Fate of Androgyny*. Chicago : The U of Chicago P, 1986.
- Weintraub, Karl Joachim. *The Value of the Individual : Self and Circumstance in Autobiography*. 1978. Chicago : The U of Chicago P, 1982.
- Wexelblatt, Robert. "The Ambivalence of *Frankenstein*." *Arizona Quarterly* 36 (1980) : 101-17.
- Williams, John. *Mary Shelley : A Literary Life*. Literary Lives. Houndmills : Macmillan, 2000.
- Wolfson, Susan J. *The Questioning Presence : Wordsworth, Keats, and the Interrogative Mode in Romantic Poetry*. Ithaca : Cornell UP, 1986.